

世界最大級の保健医療制度・政策の国際シンポジウム 「第8回 Global Symposium on Health Systems Research」 長崎で開催

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 研究科長 ^{きた}北 ^{きよし}潔 / 戦略職員 ^{よしの}吉野 ^{じゅん}純

2024年11月18日～22日の5日間の日程で、出島メッセ長崎にて保健医療制度・政策に関する国際的学術組織Health Systems Global (HSG)が主催する、世界最大規模の保健医療制度・政策分野のシンポジウム第8回Global Symposium on Health Systems Research (HSR2024)が、長崎大学と国際協力機構(JICA)の共同ホストにて開催されました。本稿では、シンポジウム概要、開催までの経緯、準備も踏まえ、このシンポジウムについて長崎大学の国内組織委員会メンバーとしての立場から報告致します。

HSRは、大学等の研究者や行政等の実務者のみならず、世界の保健医療分野の規範・基準を策定する世界保健機関(WHO)をはじめとする国際機関、そしてNGOがエヴィデンスを共有し対話を行うユニークな国際シンポジウムであり、その目的や形態は通常の国際学会とは一線を画すものです。HSRはモントルーで2010年開催の第1回以来、第2回北京、第3回ケープタウン、第4回バンクーバー、第5回リバプール、第6回ドバイ、第7回ボゴタと世界の各大陸の主要都市で2年ごとに開催されてきました。第8回となったHSR2024はアジア大洋州で2回目、もちろん日本では初の開催となりました。世界の多くの国々から保健医療制度・政策の研究・立案・実施・支援に関わる専門家が一堂に長崎の地に集いました。

今回の招致に至った経緯として、著者の一人である北が2015年に東京大学からクロスアポイントメントで長崎大学に赴任した時、当時JICA人間開発部の瀧澤郁夫氏(現在、JICA緒方貞子平和開発研究所)と相賀裕嗣氏(現在、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科)より、グローバルヘルスの分野で卓越した実績と経験を持つ長崎大学をホストとして



研究科長
北 潔



戦略職員
吉野 純

2020年のHSR2020開催を長崎に招致する提案を受けたことが始まりでした。しかし当時の長崎には10以上の分科会が可能な1,000人以上の参加者を収容できる施設がなかったため、残念ながら実現困難と判断せざるを得ませんでした。しかしその後、2021年に出島メッセ長崎とヒルトン長崎が開業し、大型の国際会議を招致する条件が整ったことで、HSR2024の長崎への招致が可能となりました。そこで「プラネタリーヘルス*」をめざす長崎大学はJICAと共にHSRの日本初開催に向け、当時の河野茂学長や田上富久長崎市長を始め、外務省や厚生労働省からの支援を取り付けるべく活動を開始しました。100カ国以上からの参加者を受け入れるにあたり、各国機関との連携、円滑な査証発給は必須条件となります。そのため、長崎大学とJICAが共同でホストを務める体制を構築し、また株式会社ながさきMICE(出島メッセ長崎)、長崎国際観光コンベンション協会からは国際シンポジウム開催に向けた様々な情報と助言を得て、申請準備を進めました。申請書の作成にはJICAから教授として長崎大学に出向していた青木恒憲氏(現在JICAパラオ事務所長)の貢献を忘れることはできません。

このようなメンバーの努力のおかげで2022年9月、世界中の強力な他の候補都市との競争による選考を経て、HSGよりHSR2024の長崎市での開催が決定したとの通知が届きました。

これまでの保健・医療分野における実績が評価され「長崎」が選出されたことは、その地道な努力が国際的に認められたと言えるでしょう。同年10月31日から11月4日でコロンビア・首都ボゴタで開催されたHSR2022に、次回HSRのホストとして、本学より河野学長（当時）、熱帯医学グローバルヘルス研究科相賀教授ら計6人が参加しました。2年後の長崎での開催に向けて、会場やイベントの様子を隈なく視察し、より良いシンポジウム実現に参考にできるものは全て記録しました。最終日の閉会式では、河野学長（当時）が登壇。開催地プレートの引継ぎおよび、長崎での開催歓迎の意のスピーチを行いました。

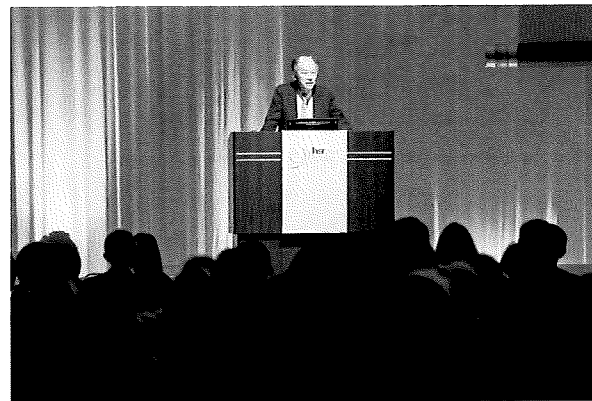
ボゴタからの帰国後、我々は本格的な開催の準備を開始しました。もちろん、この規模のシンポジウムの運営を長崎大学とJICAのみで務め切ることはできません。日本国内において国内組織委員会（LOC: Local Organizing Committee）を組織し、長崎大学、JICA、国立国際医療研究センター（NCGM）、日本国際交流センター（JCIE）、長崎国際観光コンベンション協会、日本国際保健医療学会、世界保健機関（WHO）健康開発総合研究センター、グローバルヘルス市民社会ネットワーク、長崎市、アジア開発銀行駐日代表事務所の計10団体がLOCメンバーとして加入し、アカデミアのみならず、行政組織や国際援助機関、市民社会組織からの参画を得て、定期的な打ち合わせの場を持つことで長崎におけるこの分野で世界最大級の国際シンポジウム開催に向けた盤石の体制を整えることができました。



【写真1】武見敬三 前厚生労働大臣による基調講演

しかし、約1年間の開催準備の過程は本当に問題、課題の連続でした。今回からHSRの事務局機能を担うこととなった英国のコンサルタント企業とのやり取りでは、こちらが目指すシンポジウムのクオリティや付加価値に対する意見の相違に苦慮し、予算確保も難航しました。英国との時差もあり事態の収拾に向け深夜まで対応を余儀なくされた日も幾度となくありました。開催準備は困難を極めました。LOCだけでなく会議運営会社や渡航手続き参加登録を担う国内旅行代理店企業など関係者の皆様の尽力もあり、全ての課題を乗り越え、2024年11月18日に無事長崎での開催の初日を迎えることができました。

HSR2024には、110か国から1,552人の保健政策・保健システムの研究・立案・実施・支援に関わる専門家が参加しました。今回のメインテーマは「Building Just and Sustainable Health Systems: Centering People and Protecting the Planet」、地球温暖化への対応を視野に入れつつ、人々を中心に据えた保健システムの構築と強化を目指すものでした。本テーマは、以下の4つのサブテーマによって構成されました。「サブテーマ1：気候変動にレジリエントな保健システム強化」、「サブテーマ2：平時と紛争下における保健システムの公正、包括性・一体感の推進」、「サブテーマ3：公正で持続可能な保健システムのための保健ガバナンス、保健政策、保健システムの枠組み」、「サブテーマ4：公正な保健システムのための知識」です。各サブテーマに基づき、全体セッションが計4セッション開催され、さらに企画セッション（58セッショ



【写真2】Plenary session Iにて
渡辺知保長崎大学学長特別補佐

ン)、能力強化セッション(25セッション)、個別セッション(口演・ポスター含む857演題)、サテライトセッション(60セッション)が5日間にわたり行われました。11月19日の開会式では、国会対応で会場参加できなくなった武見敬三前厚生労働大臣による基調講演がビデオメッセージ形式で行われ、歓迎レセプションでは大石賢吾 長崎県知事ならびに鈴木史朗 長崎市長からご挨拶を頂くなど、国や長崎を代表する要人の参加も得ることができました。

こうした多くのセッションが行われた中で、プラネタリーヘルスを掲げる長崎大学も世界に向けてその存在感を十二分に発揮しました。特に注目を集めた全体セッション I「Planetary Health and Health System」では、渡辺知保長崎大学学長特別補佐が座長を務め、ニュージーランド元首相ヘレン・クラーク氏をはじめとする4人の著名なパネリストとモデレーターが登壇しました。このセッションでは、気候変動や格差といった新たな脅威に直面する現代において、公平で強靱な保健システムの構築が求められていることについて、多角的な議論が展開されました。サテライトセッションでは、長崎大学の熱帯医学研究所、核兵器廃絶研究センター、医歯薬学総合研究科、離島・へき地医療学講座、プラネタリーヘルス学環の5組織が一堂に会し、1日半にわたるオムニバス形式で「Reducing Global Risk: Interdisciplinary Research from Nagasaki to Achieve Planetary Health」をテーマとしたサテライトセッションを開催しました。長崎大学が誇る包括的な研究成果、その一

端が世界に向けて発信され、そのプレゼンスをさらに強調する機会となりました。

シンポジウム会場である出島メッセ長崎の外でも、長崎の地の利を生かした2つのタイプのスタディツアー A、Bを開会式前の11月18日から19日にかけて実施しました。スタディツアー Aでは、30か国から49名の参加者がフェリーで五島列島福江市を訪問、長崎大学の五島拠点の先生方より協力を得て、離島医療の実践例やドローンを活用した医薬品の遠隔地配送デモンストレーション、離島の保健行政機能を有する保健所の視察といったプログラムを1泊2日の日程で提供しました。多くの参加者から五島への再訪を望む声が多く上がるなど、大変好評を博しました。長崎大学坂本キャンパスを舞台としたスタディツアー Bには30か国から62名が参加。熱帯医学研究所より金子修所長、金子聰副所長、原爆後障害医療研究所より中島正洋所長、高村昇教授、Vladimir SAENKO准教授、さらに長崎大学病院感染症制御教育センターの田代将人副センター長による特別講義が行われ、講義後は坂本キャンパス内の熱帯医学ミュージアムや原爆医学資料展示室を巡ったほか、坂本キャンパスの近くにある長崎原爆資料館も訪問しました。ツアーの最後には、HSR2024の特別に注文した看板で装飾された路面電車に乗り、会場である出島メッセ長崎に戻るという趣向を凝らしたことで、参加者からは大変好評を得ました。この2つのスタディツアーはシンポジウム会場外にてセッション以外の様々な形で長崎大学の教育、研究、社会貢献を世界に発信



【写真3】 歓迎会にて- (左より)相賀裕嗣TMGH教授、大石賢吾 長崎県知事、Adnan Hyder HSG理事長、鈴木史朗 長崎市長、筆者



【写真4】 能力強化セッションの様子

するユニークな取組みとなりました。

このシンポジウムでは、長崎大学の学生が中心となつての日本文化の演出も、海外からの参加者を大いに魅了しました。歓迎会では龍踊部と医学部弓道部がそれぞれ伝統的な演舞を披露し、懇親会では、よさこい部「突風」が力強く情熱的なパフォーマンスで会場を圧倒しました。さらに、河野前長崎大学学長による書道パフォーマンスでは、力強さと繊細さが融合した筆遣いが披露され、「夢」に観客からは感嘆の声が上がりました。

日程最終日である11月22日、閉会式に長崎大学の永安武学長とJICAの井本佐智子理事が登壇し、公正で持続可能な保健システム構築の重要性を訴えました。その後、次回HSR2026の招致都市として紹介されたアラブ首長国連邦のドバイの代表者へ開催地プレートが手渡され、長崎でのHSR2024は成功裏に幕を閉じました。

最後になりますが、LOCを代表して、長崎大学の学術発信にご参画頂いた全ての先生方、完璧な準備を整えてくださった事務職員の皆様、そしてボランティアとしてシンポジウム運営を支えてくださった留学生や卒業生を含む75名の長崎大学学生や大学院生の皆様に、心より感謝申し上げます。また、今回の開催準備に際し、長崎一丸となつてご尽力頂いた長崎

大学以外の全ての皆様にも、改めて深く御礼申し上げます。まことにありがとうございました。

*長崎大学のめざすプラネタリーヘルス

<https://www.plh.nagasaki-u.ac.jp>



【写真5】 懇親会にて -
河野前長崎大学学長による書道パフォーマンス



【写真6】 閉会式にて-永安学長による次回開催地ドバイ代表者へのホストシティプレート引き継ぎ



【写真7】 HSR2024 国内組織員会集合写真